

## チームワーク医療

お産でも手術でも一人でやるには限界がある。患者さんとの出会いは<一医師と患者>として始まるが、入院すると病院のスタッフ全員との関わりの中で実際の治療が行われていく。中でも、患者さんと一番多く接しているのは看護婦ではなかろうか。入院中の患者さんの病状は、看護婦からの報告が大きな比重を占めることになる。ある患者さんの闘病日誌に、「脈を測りに来る看護婦の手の温もりは来るたびに違って、その時の看護婦の状態が手に取るように感じ取れる」と書かれていた。それだけ、患者さんから見ると常に身近にいる看護婦のことが気になり、また、頼りにしているのだろうと思う。しかも、驚くことに患者さん達は医師を中心とした看護婦達とのチームワークの良し悪しを正確に見ている。実際の医療は、一人の医師だけでできるものではなく、看護婦や病院のスタッフ全員の協力のもとで行われている。そのことは、患者さんが一番よく知っている。

通常、何もなければ必要な処置が済むと次の診療に取りかかり、その患者さんのことは殆ど頭から消え去っている。

「おめでとう、元気な男の子ですよ！」と言ってひと安心していても、しばらくして「先生、産後の患者さんの出血が多いのですが・・・」と報告されて行ってみると、ショック状態寸前になっていて、緊急処置によって大事に至らずに済んだ事もある。また、術後の患者さんがトイレに行くために歩いた後、具合が悪くなったとの連絡を受け行ってみると、血圧が下がり胸部苦悶を訴えていた。肺血栓症と診断され、一命を取り止めたことも・・・。

常日頃、医師と看護婦をはじめとしたチームワーク医療がいかに大切かと声を大にして理解し合っている、医療の現場はそんなに格好の良いものではない。実際には、採算を無視した医療はできないこともあり、限られたスタッフで<質の医療>というより<数の医療>をしなければならないことが少なくない。

結果として、そのしわ寄せは医療現場の看護婦はじめ、医療従事者へと向けられ、最後に一番立場の弱い患者さんへと向けられていくことになる。

このような状況で、一旦異常が起こったりすると「もっと早く！」と看護婦に声を荒立てながら指示することもしばしば起こる。感情を抑え、緊張して介助する看護婦に対して“イケナイ”と思いながらも……。緊急事態を切り抜け冷静になった時、「大きな声を出す時は、余裕がない状態と思って理解してほしい」と弁解することもしばしばあって、「先生、そんなに看護婦さんを怒らないで・・・」と患者さんにたしなめられる一幕も。一分一秒を争うとき、誰に余裕等あるだろうか。

それにしても入院した患者さん達は、我々スタッフが想像する以上に医師と看護婦をはじめとした、自分達を取り巻く人達の状況を素早く把握している。それだけ自分の病気に対して真剣になっているのだろう。

<チームワーク医療>とは、<思いやり、愛の医療>だと思う。そのためにも、もっと自分自身が努力しなくてはと思うのだが・・・。